
珊瑚珠

戴星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珊瑚珠

【Nコード】

N5478D

【作者名】

戴星

【あらすじ】

平沼と言う老女の歌う、故郷の歌らしい方言混じりのそれに興味を引かれた主人公は、彼女にその歌の意味を興味本位で尋ねる。彼女はゆっくりと語り始めた。その歌の由来を、己の幼い頃の思い出を。

珊瑚珠

「お月さん桃色 誰ん言つた あまん言つた あまの口 ひきさけ」

聞いたことの無い歌だ それにしても引裂け、とは随分怖い歌ではないか。耳を悪くしている彼女の傍へ歩み寄って、肩口で比較的大きな声を出す。

「平沼さん、それ……故郷の歌なのかい？」

「へえ、お耳汚しでえろう濟まんことです」

「いや、初めて聞いたんで気になっただけだね。確か、高知の生まれだっけ？」

「そうですね、今は高知言いますかね……妾^{あたし}らあの小さい頃は、まだ土佐の国じゃあ言いよりましたけど」

口数も少なく、一人で虚空を眺めているばかりの彼女が自分の事をこれ程明瞭^{はつきり}と語つたのは初めての事だつた。それも無理はない、何せ此処は現代の姥捨て山 完全なる営利目的で運営されているとまでは言わないが、老人ホームとは得てして心弾むような場所では有り得ない。私は彼女を少しでも喜ばせたい一心で、質問を重ねた。

「お月さんつて言うのは、何かの隠し言葉なのかな？」

「珊瑚の事ながですけど……」

「サンゴ礁とかの、あの珊瑚？」

「宝石に、なるがです……そりゃあもう深いトコに居って、海女んでも無いと取れんがです」

彼女は突然腰の巾着に手をつ込んで、愛しむように大粒の桃色に輝く珊瑚を取り出す。これがモイロサンゴ言います 私の方へその宝石を差し出ししながら、彼女は泣きそつな顔で笑って見せた。

「桃色お月さん、欲しい」

千代が熱に魘うなされるまま口走った一言に、太一は背筋の凍る思いがした。土佐の国の特産品として知られる珊瑚、しかしそれはあくまで中央への献上品としての話だ。特に血赤サンゴやモイロサンゴ等を加工して作られる大粒の珊瑚珠は、太一や千代のような平民には口にするのも許されないような贅沢な物であった。先日も好いた男に渡すのだとお上への献上を拒んだ海女が磔はりつけの刑に処されたばかり、「桃色お月さん」とは他ならぬその海女の考え出した隠語である。

「千代、お前……」

「浜のところで姉やに見せてもうた。あれ、欲しい」

大方千代を可愛がつてくれている海女連中の一人が、病弱な千代を喜ばせようとでも考えたのだろう。漁師小屋で職人が研磨した珊瑚珠は、海女自身の手で知藩事へと差し出される。月灘村つきなだむらの沖、水深百メートルを超える深い海に潜って珊瑚採りの海女をするという事は、熟練の者でも命を落としかねないと言う危険を孕んでいた。それでも珊瑚採りをする海女が絶えないのは、一つにはそうでもしないと食ってゆけないという事でもあるが、何よりその褒賞が莫大であったからだ。日本最初の珊瑚採りの漁場として、月灘村の名は既に広く知られていたのである。

「桃色、お月さんなあ……」

千代があと数日の命かも知れないと言う事は、誰より傍で看病してきた太一が一番良く分かっている。熱と病の所為で醜むくく浮腫んだ手足を擦ってやりながら、太一は小さく溜め息を吐いた。

「……なあ、千代にもう一遍見せちゃってくれんろうか」

翌日早速浜に出ると、千代に珊瑚を見せたと言う海女を捕まえて太一は両手を合わせた。その必死な様子に、海女の方も無視は出来なかったようだ。

「一目で……ええがじゃけんど……」

「アンタ……アホ言いな！そりゃあ千代ちゃんの事可哀想やとは思
うで？けんど、こないだあんな事が有ったばっかりながやき……い
つから太一の頼みでも、聞けん話じゃ」

海女たちは一様に、「桃色お月さん」の名を聞くだけで眉を顰め、
耳を塞ぐ。最後の一人にも手酷く断られ、とうとう太一は熱い砂の
上に腰を下ろした。大きく溜め息を吐いてはみるものの、それで事
態が好転する訳でもない。そのまま大の字に仰向けになって、流れ
てゆく雲を無為に眺めた。

「……自分で、取ってこれんろうか」

太一とて、それがどんなに危険な事かは良く分かっている。母は蝦
蛄貝を採りに潜る海女だったし、父は小さいながら漁船を持つ海
男だった。流行病で二親を早くに亡くした太一と千代にとって、見
る機会こそ少なかったが両親の仕事姿は決して忘れられる物ではな
い。汗と砂に塗れて網を曳く父も、大きな蝦蛄貝を幾つも抱えて大
儀そうに帰って来る母も。そんな両親を見て育った太一だ、海の恐
ろしさは、嫌と言うほど知っている。その上、万が一無事に珊瑚を
取って来れたとしても、それが千代の物になる日など来ないとい
う事も。

しかし、それでも今、死に行く妹の為に太一がしてやれる事は他に
無かった。祈る事はとうに止めてしまった。寄進と称して金を集
め、私腹を肥やすだけの寺社の人間達の姿を垣間見てしまったその
日から。

「千代……」

父母を奪った流行病が、今度は幼い千代までも自分から取り上げる
つもりなのだ。重すぎる現実と耐えきれない不安に、太一は思わず
拳を強く握り締めた。

「取ってきちやるき、ええ子で居りよ^お」

千代の額へ濡れた手拭いを被せてやりながら、太一は優しく囁いた。

苦しげな口元が僅かに緩んで笑みを作るのを嬉しそうに見やつて、太一は立ち上がる。珊瑚の大体の位置くらいは、己でも見当がつく。何より太一には、自分は海で育つた男なのだという確固たる自信があつた。

「行つてくるきな」

後ろ手に小屋の扉を閉めながら、太一は己を勇気づけるよう力強く頷いたのだつた。

左手に握つた大振りのモモイロサンゴに、太一は人知れず笑みを深くした。あとはこの珊瑚を漁師小屋で磨いてもらうだけだ。千代が少しでも元気になれば、いや、あの花開くような可憐で無邪気な笑みを見せてくれればそれで、己の苦勞も報われようという物だ。

百メートルと言う圧倒的な距離の向こうに煌く水面を見上げて、太一は一度海底を強く蹴り付けようと思いきり身を屈めた。足の裏に触れた土の感触を捉えて、ぐっと力を込める。だが、太一の体は中途半端に浮き上がった後、不自然な力に止められてしまう。太一は慌てて足元を見る。あまり光の射さない海底でも、その正体は容易に知れた。

藻や……おかんがいつつも、言うつたやないか……。

失念していた。己の母が蝦蛄貝を取りに潜る時、真に気を付けていたのは一度閉じると貝柱を断たぬ限り口を開かないというそれではなかつた事を。本当に恐ろしいのは、この辺りにびっしりと群生している、丈の長い丈夫な海藻類や藻であつた。一度絡めとられれば、足搔けば足搔くだけ身に纏いつくその藻の所為で、何人かの海女や漁師は実際に命を落としている。あまりの恐怖に口内の空気も全部吐き出してしまった太一は、持っていた小刀で必死に藻を切るうと試みた。

全ての努力が徒勞に終わった時、太一は小刀を投げ捨てた。ぬめる表面には、珊瑚を切つて欠けた刃は太刀打ちできなかった。千代はまだ生きているだろうか。己の帰りを、律儀に待っているのだろうか。己が死んだあと、誰が千代の面倒を見てくれるのだろうか。眼前に迫っている死の事實は、覚悟を決めた太一にとってそれ程苦痛ではなかった。ただ、残してきた妹の事だけが、心残りだった。結局珊瑚も渡せずに、自分が千代の為にと思つてした事が裏目に出まわっているその現実こそが、悔やまれるのだった。

千代。

千代、千代……ごめんなあ、千代……。

薄れてゆく意識の中で、太一は親子四人が仲睦まじく暮した儂い蜜月のことを思い出していた。

「揚がつたぞオ」

太一が消えてから五日後、腐乱し、魚にあちこちを食い散らかされた一体の死骸が浜へと打ち上げられた。その背格好や死後の時間の経過から、何より、その手に固く握り締めていた珊瑚の枝が、その人物を太一であると証明していた。人々の間を半狂乱になつた幼い娘が駆けて来る。今や天涯孤独の身となつた、千代であつた。

「兄やん、嫌や、千代を一人にせんといてえ……！千代が悪い子やつたき、あんなこと言つたき兄やんが……嫌やア、謝るき、謝るき帰つてきてえ！」

髪を振り乱して絶叫する幼子を後ろから羽交い絞めにしながら、村人たちは目の前の遺体に静かに手を合わせた。おもむろに一人の海女が、太一の手に握られていた珊瑚へ手を伸ばす。それを素早く

袂に隠した事に対して、村人たちは誰も何も言わなかった。

暫くすると、病から回復して海辺を歩く千代の姿が見られるようになった。その腰に提げた巾着袋には、大きな丸い玉が入っている。千代はそれを軽々しく誰かに見せるような愚かな真似はしなかった。ただ時折表面を擦りながら、「兄やん」と呼びかけてみる。桃色のその宝石の中に、兄の生きていた証を見出そうとするかのよう

に。
そうして千代は恋をし、結婚をし、戦争を経験して、そうして結局誰より長く、生きてきたのだ。

「これが、その時の珊瑚です」

彼女から差し出されたその珠を両手で受けて、私は感嘆の息を吐く。高度経済成長期を経験した後の日本にあつて、そのような大きさの宝石珊瑚は天然記念物と呼んでも差支えないだろう。皺だらけの掌へそつと輝く珠を返して、私は彼女の背負っている業を思う。辛い人生を思う。

「……悲しい歌だね」

「まっこと」

彼女の瞳は珊瑚珠を眺めながら、きつと死んでいった者たちを透かし見ているのだ。訳もなくそう思えて、私は熱くなった目頭を押さえた。

(後書き)

友人に土佐弁(というらしいです)を使う子がいまして、たまたまネットが何かで見かけた「桃色お月さん」という歌をモチーフに、小説を書いてみたくなってこの作品が出来ました。拙い作品ではありますが、感想等頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5478d/>

珊瑚珠

2010年12月25日13時30分発行